

第2部 スーパーグローバルハイスクール（SGH）の取り組み

I. 第3年次の取り組みの概要

doi: 10.18999/bulsea.64.84

第1章

研究開発の理念と概要

三小田 博 昭

平成29年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	なごやだいがくきょういくがくぶふぞくちゅう・こうとうがっこう						②所在都道府県	愛知県
27～31	①学校名	名古屋大学教育学部附属中・高等学校							
③対象 学科名	④対象とする生徒数（2015.2.3現在）							⑤学校全体の規模	
	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年	高校3年	計	併設型中高一貫高（中学各学年2クラス、高校各学年3クラス）中学238名、高校360名、合計598名	
普通科(男)	40	39	40	54	58	56	287		
(女)	40	39	40	66	61	65	311		
⑥研究開発 構想名	トップ型TGUと一体化して「自立した学習者」を育てる探究型カリキュラム構築								
⑦研究開発 の概要	本構想は、本校の規定するグローバル・リーダーである「自立した学習者」の育成を目標とし、以下三つの研究開発を行う。Ⅰ) 必修「総合人間科」の仮説検証型探究カリキュラムへの再構築。Ⅱ) 理解・思考型学習「協同的探究学習」による学習方法の開発。Ⅲ) 国内外グローバル拠点を活用した論理的表現力を高める教育方法の開発。以上を名古屋大学と一体化して実施し、高大接続の「名古屋大学モデル」発信を目指す。								
⑧研究開発の内容等	⑧1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>本構想の目的は、グローバル化が進んだ世界で活躍する「自立した学習者」を育てることである。「自立した学習者」とは、ものごとの本質を地球規模で捉え、自分の力で探究し続ける勇気と判断力のある人間であり、本校の規定するグローバル・リーダー像である。この目的のため、本校はトップ型SGUである名古屋大学と一体化し、探究型カリキュラムの開発と構築を目指す。以下の三点を目標とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地球的課題に取り組むことで国際的視野を持ち、ものごとの本質を捉え、既存の問題と潜在的な問題の発見を行い、論理的・多角的に考える力を持ち、探究し続ける生徒の育成。 ・個別探究と集団による探究を通して、他者と協同して問題解決ができる国際的素養を身につけた生徒の育成。 ・自らの考えを適切な方法で論理的に他者に表現し、勇気と判断力のある生徒の育成。 <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>本校でカリキュラム開発した「総合人間科」は、生徒の進路選択や大学での学びに繋がる事例も多く、成果をあげているが、一年単位の学習のため探究を今以上に深めにくい（Ⅰ）。本校はSSH指定を機に、理系科目を中心に「協同的探究学習」を取り入れた結果、理系生徒の思考力、表現力などが向上した。一方、文系生徒の伸びは高くない。この学習法を理系科目中心に展開したためと考えられる（Ⅱ）。本校はSGHアソシエイトとしての活動、ユネスコスクールとしてのESD実践の他、学校の国際化に尽力し、海外提携校との交流や交換留学生受け入れに積極的である。しかし現状では生徒交流で終始し、英語による探究活動に至っていない（Ⅲ）。以上の課題解決のため、三つの研究開発を行う。</p> <p>Ⅰ) 6年間必修科目「総合人間科」の仮説検証型探究カリキュラムへの再構築</p> <p>一年単位の学習方式から6年一貫型のカリキュラムとし、PBLに基づく仮説探究型の学びにする。国際バカロレアのTOKを取り入れ、仮説検証に必要な批判的思考力を育て、探究型学習に役立てる。これらにより「自立した学習者」が育つ。</p> <p>Ⅱ) 理解・思考型学習「協同的探究学習」による学習方法の開発</p> <p>SSHの成果を受け「協同的探究学習」を文系・実技系教科に拡大、個別と集団での探究を行う。国際的素養が獲得され、協同的な課題発見力・解決力が高まる。</p> <p>Ⅲ) 国内外グローバル拠点を活用した論理的表現力を高める教育方法の開発</p> <p>国内拠点で他校生徒、留学生らと、海外拠点で現地校の生徒と、地球的課題の解決方法を考える協同プロジェクトを行う。これらを通し、英語での論理的表現力、課題解決力が高まる。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>SGH研究成果発表会を催し、成果を発信する。研究成果を紀要にまとめ、関係機関に配布し、成果の普及を図る。生徒の各種コンテスト・発表会への参加を奨励し、生徒を通じて成果を発信する。海外拠点での課題研究については現地で成果報告会を行う。幹事校が運営しているSGH専用ホームページも積極的に活用し、SGH校と情報を共有する。</p>							

<p>⑧ 研究開発の内容等</p>	<p>⑧—2 課題研究</p> <p>(1) 課題研究内容 併設型中高一貫6年間の教育課程を通し、「自立した学習者」を育成することを目的に、Ⅰ) 必修科目「総合人間科(課題探究Ⅰ・課題探究Ⅱ)」、Ⅱ)「協同的探究学習」、Ⅲ) 国内外グローバル拠点の効果的活用法の開発、以上三つ研究開発単位で実施する。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 「総合人間科」: 中学では「生き方を探る」「生命と環境」「国際理解と平和」をテーマに、幅広い興味関心を養い、専門家へのインタビューなどを通じ、個人・グループ単位で研究をする。段階的に仮説検証型課題を取り入れ、高校での研究の基礎を築く。高校では地球的課題に対応する六つの研究領域(生命、自然と環境、心、人権と共生、平和、文化)を設け、仮説検証型課題探究を行う。パフォーマンス評価や、ポートフォリオ評価を行い、地球的課題への理解や課題解決への考えを持てたかを検証する。 「協同的探究学習」: SSHで成果があった学習法を文系教科・実技系教科に広げる。この学習では、教師が設定した多様なアプローチが可能な課題に対し「思考プロセスを明らかにする個人探究場面Ⅰ」「多様な考えを比較検討する協同探究場面」「知識の関連づけから問題の本質をつかむ個別探究Ⅱ」の三段階を踏んで学習する。アンケートによる量的調査と記述問題による質的調査を行い、生徒の理解・思考が深まったかを検証する。 「国内外グローバル拠点」: 名古屋大学に国内グローバル拠点を置き、大学教員、留学生、他校生徒と地球的課題の解決方法を討論するGlobalDiscussionを実施し、課題解決力向上をはかる。アジア拠点(新モンゴル高校)、北米拠点(EastChapelHillHighSchool)を活用し、現地高校生と協同して課題研究・発表を行う。生徒へのアンケート調査と生徒の発表内容から、論理的表現力が向上したか、課題解決力が高まったかを検証する。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 なし</p>
<p>⑧—3 上記以外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 留学生TAを交えた少人数集団で世界的課題を討論する課外講座、ActiveLearninginEnglishを実施する。テーマは毎回異なり、大学教員からテーマについて講義を受け、集団で解決策を討論し、発表と振り返りをする。全活動を英語で行う。毎回のレポートと討論内容をTAと検討し、英語での情報分析・発信力、課題解決力が高まりを検証する。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 なし</p> <p>(3) グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法 トップ型SGU名古屋大学の資源を活用し、大学の英語力向上プログラムや初年次教育の講義へ本校生徒を参加させる。SGH生徒研究員制度により、国際的活動を行う生徒を増やす。コミュニケーション力向上プログラムとして、ESDコンソーシアムなど三プログラムを活用し、初対面の人と協同で課題解決を図る機会を作る。校内で流鏑馬や日本礼法教室などを開催し、日本で生活する生徒としてのアイデンティティを育成する。JICEなど公的機関との連携し、高校生・教員を本校に招き、協同課題解決などのプログラムを実施する。GlobalEducationCenterを設置し、留学生徒を支援する。名古屋大学と連携し、高校、大学入学者選抜の一体的改革を行い、名古屋大学モデルを発信する。</p>
<p>⑨ その他特記事項</p>	<p>スーパーサイエンスハイスクール(2期、平成18年～平成27年度)、「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」(平成25年～平成26)「SGHアソシエイト」(平成26年度)で培った研究成果を活用し、名古屋大学と一体となってグローバル人材の育成を目指す。JICE、AFS、YFUを通して、長期・短期留学生を毎年100名以上受け入れている。昨年は海外研究者・教員の訪問を50名以上受け入れた。</p>

(別紙様式3)

平成31年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	愛知県名古屋市千種区不老町
管理機関名	国立大学法人名古屋大学
代表者名	松尾 清一 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月1日（契約締結日）～平成31年3月31日

2 指定校名

学校名	名古屋大学教育学部附属中・高等学校
学校長名	中嶋 哲彦

3 研究開発名

TGUと一体化して「自立した学習者」を育てる探究型カリキュラム構築

4 研究開発概要

研究開発4年次/5年次を成果普及の年、成果の検証の年として捉えた。普及に関してはSGH研究成果発表会を開催(H31.02.08)し「課題研究」及び、「協同的探究学習法」の公開授業を実施した。研究成果発表会には、全国から178名（教員《124名》、大学生《46名》）と教育委員会他《8名》が参加した。また、ALE(Active Learning in English)やGlobal Discussionに他校生徒も参加できる制度を構築し、本校生徒以外にも、規定以上参加した他校生に修了証を交付した。

成果の検証においては、本校が目標とする「自立した学習者の育成」の達成度を「意識調査」及び「思考力調査」を用いて測定した。また、名古屋大学の学生調査も今年度初めて実施した。卒業生アンケートも本格的に実施し、卒業生の動向を調査した。また、学校の国際化を更に推進するため、これまで複数名受入れていた長期留学生に加え、「アジア高校生架け橋プロジェクト」の留学生（タイ国）を半年間受入れた。